

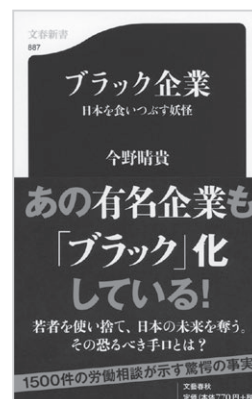
お薦めの一冊

『ブラック企業 日本を食いつぶす妖怪』

今野晴貴 著 文春新書 809円(税込)

若者を使いつぶし、コストは社会へ転嫁
将来を考える上できわめて深刻な問題

会員 西山 寛 (65期)



1 個人的な被害から社会問題へ

本書は「ブラック企業」問題について、パワハラ、セクハラ、長時間労働といった個人的な被害を強調するだけでなく、社会問題として捉えることの重要性を提言している。

著者は、1983年生まれの大学院生であり、若者の労働相談に取り組むNPO法人「POSSE（ポッセ）」の代表でもある。

2 ブラック企業の実態と弊害

「ブラック企業」とは、従来は「暴力団のフロント企業」というイメージを持たれる言葉であったが、現在では一般的に「違法な労働条件で若者を働かせる企業」として使われている。

本書では、実際に退職を余儀なくされたケースや、過労自殺に追い込まれたケースなど、具体的な事例をもとに、「ブラック企業」の実態が報告されている。

若者を大量採用して使い捨てる。会社にとって従順な人間に作り替えるための不合理な『新人研修』、『指導』という名のいじめ。些細なミスを見つけては罵倒し、人格を完全否定するという徹底的な従属とハラスメント。必要以上の長時間労働や公私の区別のない拘束。鬱病にさせて休職期間を与えた後に自己都合退職にさせるといった、具体的な事例を通して、「ブラック企業」の生々しい手口が紹介されている。

また本書は、「ブラック企業」と労働者の間に介在する、悪徳な社会保険労務士や弁護士といった「ブラック士業」の存在についても問題視している。

3 社会問題としてのブラック企業

前述のとおり、本書は「ブラック企業」を社会問題として捉えている。第1の問題は若く有益な人材の使いつぶしであり、第2の問題はコストの社会への転嫁である。「ブラック企業」の抱える問題は、成長大企業による大量採用・大量解雇（離職）によって若者が使いつぶされるという問題だけでなく、これらのコストを制度的・組織的に社会へと費用転嫁している問題も含んでいる。

「ブラック企業」問題は、若者の鬱病、医療費や生活保護の増大、少子化、消費者の安全崩壊、教育・介護サービスの低下を招く。鬱病の増加は生活保護や医療費の増大を招き、将来や生活への不安は少子化につながる。

このように、本書は「ブラック企業」が労働者の個人的問題であるばかりでなく、日本社会の将来を考える上できわめて深刻な問題を含んでいるとして、「ブラック企業」がいかに日本という資源を食いつぶしているのかを説明している。

4 戦略的に立ち向かう必要性

本書は、「ブラック企業」への対抗策として、「ブラック企業」の戦略に対しては、若者も労働法や専門家を活用して戦略的に立ち向かうべきであり、社会的戦略として労働組合やNPOに相談、加入して新たなつながりを持ち、労働法教育の確立と普及が必要であるとする。

自民党は今年の4月、厳しい労働環境が問題となっている「ブラック企業」について、社名公表などの措置を政府に提言する方針を固めた。

本書により、社会問題としての「ブラック企業」を理解することができる。